「古典」を読む
――「枕草子」の場合――

大崎康子

はじめに

教室で読んできた古典教材の中で、くり返しに耐え、新しい感動を再生し得る古典教材は、「万葉集」「伊勢物語」「平家物語」「徒然草」「芭蕉」、それに「源氏物語」と考えてきた。今年度、三年の文系クラスで、「枕草子」を続けて読む機会があり、ほとんど初めてこの作品の価値にぶつかった思いがする。

一　教材としての「枕草子」

生徒たちのこの作品についての既習範囲は、「春はあけぼの」「あてなるもの」「虫は」「ありがたきもの」「関白殿、黒戸より」「五月ばかり、月もなう」「五月ばかりなどに山里にありく」「よろづのことよりも情けあるこそ」「雪のいと高う降りたるを」である。

今度教材として用意したのは、次の段である。「すさまじきもの」「にくきもの」「中納言まゐり給ひて」「二月つごもり頃に」「雪のいと高うはあらで」「宮にはじめてまゐりたる頃」「ふと心劣りとかするものは」「文ことばなめき人こそ」「世の中になほいと心憂きものは」「うれしきもの」「御前にて、人々とも」「この草子、目に見え心に思ふことを」以上十二段を、古典Ⅱの教材となっているもの、入試問題として頻度の高いものの中から選んだ。

二　「枕草子」のおもしろさ

人間の書としての「源氏物語」に対して、繊細な感受性がとらえた〻感覚美の世界〻という認識だけでは、「枕草子」の読みは深まらない。刻々と変化する雲の色どりや、車の動きによって立ちのぼるよもぎの香りも、それはそれで美の世界へ誘われる。けれど、それだけでは物足りない。久しい間、この作品は、私の中で位置を占めなかった。

入試問題としての頻出度が高い故に、さほどおもしろくもないのに読み続けるというのは、不幸である。古文の授業は、暗記科目に堕し、文法は言いかえのための知識にすぎず、「読むこと」の楽しみからは遠ざかる。「枕草子」の全体を読み通してみよう。そして何故、清少納言はこの作品を書いたのかをさぐってみよう。「表現されたものの内実に触れるためには、動機をつかむことだ」と思いついて、萩谷朴氏の「枕草子」を通読した。

思い切った改行による読みの視覚化も新鮮で、「この作品全体を構築している大主題は自由な連想作用である。」とする萩谷氏の解

釈に導かれて、作者の心の動きを追ってみると、思いがけない発見がある。

「後朝の別れの情」を描いて高名な、「七月ばかり、いみじう暑ければ」の段などは、色彩は艶やかに、感覚は鮮やかで、視点は外にありながら、人物の微妙な心理の動きをうかがわせ、ある情趣を一つの情景として描き出す力のみごとさを感じさせる。自然描写の鋭さを言うにとどまっていたこの作品の中で、人間についての洞察の深さを随所に見いだすことができた。とりわけ、教材化されにくい恋の場面とか、後朝の情趣についての描写の多さに驚かされた。男女の交際がきわめて開放的であった、当時の貴族社会の当然の反映であろうし、多感であったろう清少納言にとっては、当然の関心事でもあったのであろう。ここに示された女から男への、さらには人間そのものへの洞察を、生徒に紹介しようと考えた。

萩谷氏は、新潮日本古典集成「枕草子上」の解説の中で、作品執筆の動機を次のように述べておられる。「むしろ、長徳二年の秋、中宮方の誰彼から左大臣道長方に内通しているとの疑惑の目を向けられることに耐えきれなくなって、長期の里居を続けた時、そのような苛立たしさや虚しさを逃れて、精神の安定を求めるために、心に浮ぶままのことを書きとめて、気を紛らわせたと考える方が、より真実性に富む。……つまり、「枕草子」は熱心な愛読者の期待に応えて、主知的な類想から主情的な随想へ、さらに興味本位の回想的章段へと、逐次内容を拡充していったものと思われる。そして、最終的には、皇后定子の哀愁に満ちた晩年と、傷ましい崩御を眼のあたりにし、そのご生涯を追慕するとともに、三人の遺児たちの将来を思いやって、皇后のご遺徳を讃仰する敬愛の精神に貫かれた回想段を前面に押し出してくることとなったのであろう。」――これもまたひとつの仮説なのであろうけれど、書こうとした清少納言のなまなましさに触れた思いがした。権力争いのはざまにあって、彼女もまた心揺れる一人であった。

三　授業の中で

授業は講義にしたり、演習にしたりしながら基礎読みをし、読み深めの過程で、表現の内実に迫ろうと試みた。作品への教師の評価は、そのまま生徒にはねかえる。教師にとって真に「古典」たり得る時、作品は教室で光りだす。

〝読み深め〟――その一――

一九五段「ふと心劣りとかするものは」

この段は次の一文で始まる。

「ふと心劣りとかするものは、男も女もことばの文字いやしう遣ひたるこそ、よろづのことよりまさりてわろけれ。」

一言で幻滅させられる体験はかなり普遍的である。ここには、言葉が人間の精神の表出であることを知っている確かな感覚が生きており、卑しい言葉遣いによる幻滅を、「よろづのことよりまさりてわろけれ」と言い切る精神がある。

「ただ文字一つにあやしう、あてにもいやしうもなるは、いかなるにかあらん。」

どうしてそう感じるのか、それはわからない。言葉の不思議さに

思い至る。どの言葉に対してそう感じるのかも個人差があり、同じ言葉でも発する人によって、発せられる場面によって、感じ方も違いがある。たまたま、授業をしていた頃の新聞には、俳優小沢栄太郎の「嫌いな言葉」と題する小文が載っていた。

「出会い、という言葉、いつ頃から使い出したんだろう。なんかの訳語からきたのかしらん。ゲーテとシラーの、とか、ブラームスと誰かとか、まあ、そういう偉い人の場合だったらまだ解らぬでもない。なんだか勿体ぶっていて、少々大げさで、そして妙にキザっぽくて、僕はきらいである。はやりみたいに猫も杓子も使うからよけいきらいである。」

これに続いて、「ふまえて」「オンネン」「原点」などの例があげられ、これらを嫌だという理由はない、ただ役者で言うと、見てくれの芝居で、下手な芝居を、当人だけがいい気になってやっている感じがする、と述べられていた。これをきっかけとして、教室では、自分の言葉、身の廻りの言葉の発掘がしばらく続いた。

「さるは、かう思ふ人、ことにすぐれてもあらじかし。いづれをよしあしと知るにかは。されど、人をば知らじ、ただ心地にさおぼゆるなり。」

判断の基準はどこにもない。けれど「人をば知らじ」ただ自分の気持ではそう思うのです、とつぶやく。

「いやしきこともわろきことも、さと知りながらことさらにいひたるは、あしうもあらず。」

自分の言葉を自分の耳で聞いている人がいて、意識化された言葉の好もしさを主張する。「我がもてつけたるをつつみなくいひたるは、あさましきわざなり。また、さもあるまじき老いたる人、男などの、わざとつくろひひなびたるはにくし。まさなきこともあやしきことも、大人なるはまのもなくいひたるを、若き人はいみじうかたはらいたきことに聞き入りたるこそ、さるべきことなれ。」

清少納言が拒否するのは、「あつかましさ」「無神経さ」である。それが動作としてあらわれる時も、手厳しく「にくし」と言い切るが、この段では、それが言葉になって出てくる心の在り様への拒否として語られ、読者の共感を呼ぶ。この後さらに、「と」の省略が、「いはむずる」と崩れる汚なさ、「ひとつ」が「ひてつ」に、「もとむ」が「みとむ」に訛る汚なさを、幻滅させられる例としてとりあげている。

教材は続いて、「文ことばなめき人こそ」へと移っていくのだが、作品の中には、他にも言葉について言及している箇所が多くあり、「六段、おなじ言なれどもきき耳異なるも」「一五三段、名おそろしきもの」「一五四段、見るにことなることなきものの文字に書きてことごとしきもの」「二五八段、ことばなめげなるもの」などに、作者の言葉への感覚を読みとることができる。

歌が男女の恋の手だてとして大切にされ、言葉が精神の発露として有効に働いていた時代にあっては、清少納言の、言葉に対する感覚は、さほど特筆すべきことではないかもしれない。けれど、同じ時代にあっても、「文字一つにあやしう、あてにもいやしうもなるは、いかなるにかあらん。」という感覚、言葉への自覚を、多くの人が持っていたとは思えない。「我がもてつけたるをつつみなくいひたる」人は、きっと大勢いたのだと思う。

現代は喧噪の時代である。くり返されるコマーシャルを代表的な例として、言葉を発する精神の在り処に密着しない言葉の氾濫、この中にあって、言葉の暴力に抗して自らの言葉をとりもどそうとする時、清少納言は、ひとりの先達たり得る。

「言葉を軸にして、人間とはなにかということを考えつつ、そのように考える自分が、まず人間について基本的な信頼の思いをもっていることに気づく。その思いは歴史の様ざまな時をへだてて、また世界の多様に距離をおいた諸地点で、言葉について深く考える人間が、ついには同一の方向づけにいたることを見て励まされる。」これは、大江健三郎の「小説の方法」の冒頭部分である。言葉への自覚の深さ、認識の有無は、そのままその人の価値につながると考える。言葉を通路として、発言者の精神の所在につきあたり、それが、生徒たちに、自らを人間として立たしめていく契機となるようにと願う。千年の昔に生きていた一人の人は、こうして作品の中から立ち上り、われらの隣人となる。

〝読み深め〟――その二――

二六七段「世の中になほいと心憂きものは」

「世の中になほいと心憂きものは、人ににくまれんことこそあるべけれ。誰てふ物狂か、われ人にさ思はれんとは思はん。されど、自然に宮仕所にも、親、はらからの中にても、思はるる思はれぬがあるぞいとわびしきや。」

前段末尾の、「なほ、男は、もののいとほしさ、人の思はんことは知らぬなめり。」から発展して、愛憎をめぐる心の動きへと移っていく。

「よき人の御ことはさらなり、下衆などのほども、親などのかなしうする子は、目たて耳たてられて、いたはしうこそおぼゆれ。見るかひあるはことわり、いかが思はざらんとおぼゆ。ことなることなきは、また、これをかなしと思ふらんは、親なればぞかしとあはれなり。」

生徒には、「人情に即して読むべし」とくり返す。親にかわいがられる出来のいい子はまた、多くの人からも大切にされる。「見るかひある」子も、もちろんかわいがられる。（しかしまた）「何のとりえもない子」をかわいいと思うのは、親なればこそと、その思いに共感させられる。初めは、「人にさ思はれん」側からの発言、次は、「かなしとおぼゆる」側からの発言、そして、「親にも、君にも、すべて、うち語らふ人にも、人に思はれんばかりめでたき事はあらじ。」としめくくる。作者の生きていた時代との隔りは、見事に埋められて、すぐ隣で語られているかのような親近感がある。お互いをとりまく生活環境の違いなども消え果てて、人の心の動きを見ぬいて、正直にものを言う人がここにはいると感じさせられる。

原作ではこの後、「男こそ、なほいとありがたく、あやしき心ちしたるものはあれ。」と続き、「男はまことに理解しがたい不可解な存在だ」といい、「女の目にもわろしと思ふを思ふは、いかなる事にかあらん。」と嘆く。作者の男性観は、随所に見られるが、「一二四段」の「はづかしきもの、色このむ男の心の内。……男は、うたて思ふさまならず、もどかしう、心づきなきことなどありと見

れど、さしむかひたる程は、うちすかして思はぬことをもいひ頼むるこそ、はづかしきわざなれ。……いみじうあはれに、心ぐるしう、見すてがたき事などを、いささか何とも思はぬも、いかなる心ぞとこそあさましけれ。さすがに人の上をばもどき、ものをいとよういふよ。ことにたのもしき人もなき宮仕人などを語らひて、ただならずなりぬるありさまなどをも知らでやみぬるよ。」などにいたっては、まさに私達の日常茶飯事ではないかと思わされる。

教室では、「二六八段、男こそ、なほいとありがたく」を追加教材としてプリントし、「一二四段はづかしきもの」を援用し、さらに中村真一郎の「王朝文学の世界」から次の文章を引用した。

「一全ての文学的操作が、その流派、方法の多様性にかかわらず、最も深く現実を探った瞬間に、例外なく到達する、不思議な面白さが、この書物にもある。

不思議な面白さとは何か。それは生の謎に対して、読者の眼を開かせてくれる何ものかである。一体に、この社交人の感想集は、ひとつの高度の趣味を目指し、完成した世界を描くことを目的としている。この世界の秩序は明らかな価値の体系によって出来上っている。そこには、どれだけ微細に味わうか、どれだけ洗練を競うか、という程度の問題はあっても、その価値に対する疑問は起り得ないはずである。

ところが、清少納言は、そうした社交人の方法を徹底して推し進めて行きながら、時々、その方法の限界を突破して、より深い現実に触れる。そこのところが、この作品の文学としての、ひそかな魅力である。

たとえば一男というものの正体は、実に不思議で、なんといってもわからない。というような感想が突然に出てくる。社交界の主たる関心事のひとつは、男女の交際であり、清少納言も、その専門家である。男女のかけ引きの達人であることは、この書物の随所に現われている。男の全てを判っているはずである。ところが、ある時不意に、彼女は、男は謎であるという嘆きを、その手帖に書きつける。同性が見ては全く取り柄もないような女に夢中になるかと思えば、立派な女に求愛されて逃げもする。そういう不可解さを、男女の仲を知り尽した社交女性が、何かの拍子に洩らすということが、人生の面白さであり、同時に、彼女の信じている生き方、その属している社会集団の常識へ、微妙な裂け目を作って見せてくれるということになるのである。」

授業は変ってきた。「枕草子」は面白い、と思うようになった。書き手への信頼は、その人の発する言葉の真意を深くとらえさせる。

次の教材「うれしきもの」への共感度は、

「物合、なにくれと挑むことに勝ちたる、いかでかうれしからざらん。また、我はなど思ひてしたり顔なる人謀り得たる。女どちよりも、男はまさりてうれし。これが答はかならずせんと思ふらんと、つねに心づかひせらるるもをかしきに、いとつれなく、なにとも思ひたらぬさまにてたゆめ過ぐすも、またをかし。」あたりをピークとして、しだいに高まった。

〝読み深め〟――その三――

二七七段　「御前にて人々とも」

学習は前段に続くこの段へと進んできた。

「御前にて人々とも、また、もの仰せらるるついでなどにも、『世の中の腹立たしう、むつかしう、片時あるべき心地もせで、ただいづちもいづちも行きもしなばやと思ふに、ただの紙のいと白うきよげなるに、よき筆、白き色紙、みちのくに紙など得つれば、こよなうなぐさみて、さはれ、かくてしばしも生きてありぬべかんめりとなむおぼゆる。また、高麗縁の、筵青うこまやかに厚きが、縁の紋いとあざやかに、黒う白う見えたるをひきひろげて見れば、なにか、なほこの世は、さらにさらにえ思ひ捨つまじと、命さへ惜しくなんなる』」

清少納言でもこんな気持ちになることがあった。「ただいづちもいづちも行きもしなばや」、〝も〟の強意、〝ばや〟の願望。「人生に腹が立ってきて、むしゃくしゃして、ひと時だって生きているのが厭になって、もう、どこへでもいってしまいたい」、そういう時に、「ただの紙のいと白うきよげなるに、よき筆、白き色紙、みちのくに紙など」を得ると大変慰められて、「さはれ、かくてしばしも生きてありぬべかんめりとなむおぼゆる」と思い、さらに、高麗縁の美しいのを見たりすると、「なにか、なほこの世は、さらにさらにえ思ひ捨つまじ」と、もう今は命までも惜しくなるのである。

社交人として知られ、定子や行成とやりとりの妙を尽して、いかにも適応して生きていたと思われる清少納言が、こういう思いにとらわれることがあり、さらに、その厭世感、脱落感、行きどまりの感から、彼女を救ってくれるのが、「紙の白さのもつ美」であり、「畳の縁の白と黒との紋様のあざやかさ」である。先に引用した中村真一郎は、この部分について、「―そうした何気ない感覚的な美しさが、瞬時にして、自分を人生の方へ向き返らせてくれるという、彼女の感想は、何気ないものでありながら、また生というものと人間との結びつきの不思議さの、微妙な表現だというべきである。」と述べている。

教室は、ここでひとつの高みへ導かれた。私達が、「生きている」ことの中にも、清少納言が示したような転生の契機は、はらまれているのではないか。閉塞感、脱落感も、決して珍らしくなく、日々そうした思いとのこぜり合いの如き様相もあるのだけれど、私達は、自らが美と感じ得る物、例えば、ある日の青い空や、風にゆれる花々や、あるいは一節のメロディーや、あるいは真珠の輝きによって、ふと、生へと引きもどされるという経験を共有し得る。その共生の思いは、千年の隔りを越えて、清少納言をわれらの友として感じさせる。

さらに、彼女が、なぜ「紙の白さ」に魅せられたのか、その心理の背景には、「その紙にことばを書きつける楽しみ」が、ひそんでいたと考えられる。「書く楽しみ」が、「慰め」になる心の在りようへ、つまりは、「表現すること」の、人間にとっての意味へと、私達は誘われる。また一方、「白」という色が、日本文学の中で、どういう美意識と結びついているか、というのも興味のあるテーマで、例えば、芭蕉の句における〝白〟の象徴性や、あるいは、川端

康成の小説に生きている〝白〟の効果など、たどってみたい気がする。教室では、室生犀星の「日本美論」（夕映　梅花）の中にある、「紙」を紹介して、文学研究へのさそい水とした。

一人の生徒は次のように反応した。

（その限りにおいては、わかるような気もするのだけれど、例えば紙そのものに限定して考えてみると、様子はかなり違ってきている。私達のまわりに紙はあふれ、毎日、大量の紙に追いまくられて生きている。私達は、「紙の白さのもつ美」を見いだす余裕など、とっくに失ってしまった。千年前、清少納言を生へと引き戻した「白い紙」は、今や私達を焦燥感へと追い込む。物のあふれる中で、物そのものの価値を見失ってしまった私達の状況は、例えば、安部公房の「自分の名刺」にとってかわられる主人公にそっくりなのではないか。「物」を見失ってしまった私達は、自分も含めて「人間」そのものをも見失っている。現代を生きる私達が、脱落感から生へと引き戻される契機を見いだすことは、よほど困難である。けれど、例えばこういう現代の状況を「壁」として認識し、その中に在る人間の存在の虚しさを、ユーモアさへ伴って虚構化し、表現する力が人間にある限り、「この世はまだ生きているに値する」のではないかと思うのである。　T・N　女子）

丁度、現代国語の授業で読んでいた安部公房の現状認識へつなげて、自分なりの読みを示してきた。

読みとろうとする意欲は、解釈を的確にする。文法力は総動員されて、さらに読みを楽しくする。より正しく、より的確に、それは書かれてある世界の深みへと、読者を案内する。

「私達が理解している『意識』という言葉と、宣長が使った意味合での『物』といふ言葉とを使って、かう言ってみてもよささうだ、歌とは、意識が出会ふ最初の物だ、と。さう言ひたかった宣長を想像してみてもよいであらう。」（『本居宣長』）という小林秀雄に導かれて、私達も、「意識が出会ふ物」に行きつきたい。

ひとつの古典を読み深めることによって、時代を越えて共通する人間の本質への認識を深め、さらには、作者の生きた時代と現代との相違に思い至り、千年の時間を貫ぬいてくる光に照らし出される現代の特質を把握する時、私達は、この喧噪と退廃の中にあって、目覚めて在ることができる。

おわりに

ひとつの古典作品の中に、「確かな精神の在り処」を実感することは、虚しさに抗して生きようとする意欲を、かきたててくれる。

「言葉」について思いを深めることが、人間への信頼につながる道だということを、さらには、「古典を読むこと」が、「過去をたどって未来に出る」ひとつの方法なのだということを、確かめあいたい。

かくて「読むこと」が喜びになる―この喜びに生徒を道づれにしたい、それが、国語教師としての私の夢である。

毎年、卒業生を送る頃になると、私の心の中には、藤村の「響きりんりん音りんりん」が静かに鳴りだす。野地先生の朗々としたあのお声に身を震わせながら、先生を恥ずかしめない教師になるのだと、ひそかに決意したあの日は、私にとって決して遠い日のことで

はない。

（参考）

日本古典文学大系「枕草子」（岩波書店）

新潮日本古典集成「枕草子」萩谷朴校注　（新潮社）

新潮文庫「王朝文学論」中村真一郎著　（新潮社）

（愛知県立尾西高等学校教諭）